

平成 20 年度

## 病害虫発生予報第 4 号

平成 20 年 7 月 24 日

### 三重県病害虫防除所

515-2316 三重県松阪市嬉野川北町 530

TEL 0598-42-6365 Fax 0598-42-7568

ホームページ<http://www.mate.pref.mie.jp/bojyosyo>

## 目次

	ページ
1. 向こう 1 か月の予報と対策	1
2. 作物別の状況	2
3. 発生時期・発生量（平年比）の予察根拠	7
4. 予察項目の見方	13
5. 今月のトピックス（イチゴのハダニ類について）	14
6. 気象のデータ	15
7. おしらせ	17

## 1. 向こう 1 か月の予報と対策

### 1) 普通作物

イネでは、いもち病（穂いもち）、白葉枯病の発生量は少、紋枯病の発生量はやや少と予想されます。ツマグロヨコバイの発生量は平年並、イネク口カメムシ、トビイロウンカの発生量はやや少と予想されます。セジロウンカの発生量は県南部で平年並、その他の地域ではやや少の予想です。斑点米カメムシ類の発生量はやや多と予想され、防除が必要になる場合があります。

ダイズでは、紫斑病の発生量は少、コガネムシ類、ハスモンヨトウの発生量は平年並と予想されます。吸実性カメムシ類の発生量はやや多と予想されますので注意してください。

### 2) 果樹

カンキツでは、ミカンハダニ、チャノキイロアザミウマの発生量は平年並と予想されます。黒点病、かいよう病（温州みかん）、かいよう病（中晩柑類）の発生量は少と予想されます。

果樹カメムシ類の発生量は、果樹園への飛来数は平年並と予想されます。

局所的に飛来することがありますので注意してください。

### 3) 茶

チャでは、炭疽病、チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマの発生量は平年並と予想されます。チャノコカクモンハマキ第 3 世代幼虫の発生時期、発生量はともに平年並と予想されます。カンザワハダニの発生量はやや少と予想されます。

### 4) 野菜

イチゴでは、炭疽病の発生量はやや多と予想されます。葉かき後の定期的な防除と、降雨後の防除を実施してください。

### 5) 花卉

ツツジ類では、褐斑病、ツツジグンバイの発生量は少と予想されます。

## 2. 作物別の状況

作物名	病虫害名	発生時期 平年比	発生量		要防除 圃場率 平年比	発生消長の一例				防除の注意事項
			平年比	程度		7月	8月			
						下旬	上旬	中旬	下旬	
イネ	穂いもち	—	少	小	普通	出穂 ↓ 発生密度	発生密度			1) 上位葉で葉いもちが多く見られる圃場では降雨があれば穂への感染の恐れがあります。
	紋枯病	—	やや少	中	低	出穂 ↓ 発生密度	発生密度			1) 前年発生の多かった圃場では注意してください。
	白葉枯病	—	少	小	低	発生密度	発生密度			1) 毎年発生の多い圃場では注意してください。
	斑点米カメムシ類	—	やや多	中	普通	アカヒゲホソミドリカメ アカスジカスミカメ ホソハリカメムシ・クモヘリカメムシ	被害量			1) 周囲より出穂の早い圃場では被害が集中します。 2) 出穂直後に被害が集中しますが、その後も加害が続きます。 3) 防除は穂揃期、乳熟期～糊熟期に行ってください。
	イネクロカメムシ	—	やや少	小	低	被害量 誘殺密度	被害量			1) 発生圃場では、これから被害が目立つようになります。 2) イネの株元から吸汁するため、稔実が悪くなり、減収となります。 3) 日中は株元に潜んでいるので、薬剤は株元までかかるようにしてください。

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項
			発生時期	発生量		7月	8月			
		平年比	平年比	程度	平年比	下旬	上旬	中旬	下旬	
イネ	ツマグロヨコバイ	—	平年並	大	低	成虫密度				1) 9月上旬頃までに収穫の終わる圃場では、実害はほとんどありません。
	セジロウンカ	—	(県南部) 平年並  (その他) やや少	小  小	低  低	成虫密度				1) 本年は多飛来がほとんどありません。
	トビイロウンカ	—	やや少	小	低	成虫密度				1) セジロウンカの発生した地域ではトビイロウンカの被害も発生する恐れがあります。
ダイズ	紫斑病	—	少	小	低	発病密度				1) 自家採種などで紫斑病発生の恐れがあるときは防除が必要です。 2) 莢が形成され始めたら薬剤散布してください。
	コガネムシ類	—	平年並	中	普通	成虫密度				1) 薬剤防除は一斉防除が効果的です。

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項		
			平年比	平年比		程度	平年比	7月				
								下旬	中旬		下旬	下旬
ダイズ	ハスモンヨトウ	—	平年並	小	普通			被害量		<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 白変葉を手がかりに早期発見に努め、若令幼虫期に防除してください。</li> <li>2) 幼虫は葉裏にいることが多く薬剤は葉裏にもかかるよう丁寧に散布してください。</li> </ol>		
	吸実性カメムシ類	—	やや多	中	普通		開花		成虫密度	<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 薬剤散布は一斉防除が効果的です。</li> <li>2) 開花終期から莢伸長期に防除してください。</li> <li>3) 本県では、アオクサカメムシ、クサギカメムシ、イチモンジカメムシ等がよく見られます。</li> </ol>		
カンキツ	黒点病	—	少	小	低	発病密度				<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 薬剤散布を定期的実施し、8月下旬まで感染防止に努めてください。</li> <li>2) 梅雨明けと共に感染源となる枯れ枝が増加するので、切除に努めてください。</li> </ol>		
	かいよう病	—	温州少 中晩柑少	小 小	低 低	発病密度				<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 現段階で果実・夏枝に病斑が見られる園では、発病した枝・葉・果実を除去し、早急に防除を行ってください。</li> <li>2) 防風対策に努め、台風の影響が予想される場合には、直前に防除してください。</li> <li>3) 高接樹や幼木については、ミカンハモグリガの防除も徹底してください。</li> </ol>		
	ミカンハダニ	—	平年並	中	普通	成ダニ密度				<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 高温により活動が停滞する時期なので、発生が少なければ当面防除の必要はありません。</li> <li>2) 1葉当たりの雌成虫寄生数が0.5～1.0頭程度を目安に防除してください。</li> <li>3) 防除が必要な場合は、同一系統の薬剤の連用を避けてください。</li> </ol>		

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項
						7月	8月			
						下旬	上旬	中旬	下旬	
カンキツ	チャノキイロアザミウマ	—	平年並	中	普通					<ol style="list-style-type: none"> <li>寄生果率 10% になった時を防除の目安にしてください。</li> <li>7月以降は、寄生部位が果頂部に移ります。</li> </ol>
	カメムシ類	—	平年並	中	普通					<ol style="list-style-type: none"> <li>飛来が見られない園では、防除の必要はありません。</li> <li>現在は山林で世代交代していると思われます。</li> <li>樹園地（特にカキ）には局所的に飛来してくることがあるので、園地巡回をしてください。</li> <li>ナシ、ブドウの有袋栽培では、袋と果実が密着すると、袋の上から加害されることがあるので注意してください。</li> </ol>
	炭疽病	—	平年並	小	普通					<ol style="list-style-type: none"> <li>三番茶芽の開葉初期に防除してください。</li> <li>降雨時に新葉の展開していた園では感染している可能性が高いので、治療効果の高い薬剤で防除してください。</li> <li>三番茶芽に感染すると翌年の伝染源にもなるので注意してください。</li> </ol>
チャ	カンザワハダニ	—	やや少	小	普通					<ol style="list-style-type: none"> <li>高温により活動が停滞する時期なので、発生が少なければ当面防除の必要はありません。</li> <li>防除が必要な場合、薬剤に対する抵抗性を獲得しやすいため、同一系統の薬剤の連用は避けてください。</li> </ol>
	チャノミドリヒメヨコバイ	—	平年並	小	普通					<ol style="list-style-type: none"> <li>三番茶芽の開葉初期に防除してください。</li> <li>三番茶の生育期は発生が多くなるので注意してください。</li> </ol>



作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項
						7月	8月			
							下旬	上旬	中旬	
チャ	チャノキイロアザミウマ	—	平年並	中	普通	成虫密度				1) 三番茶芽の開葉初期に防除してください。 2) 三番茶の生育期は発生が多くなるので注意してください。
	チャノコカクモンハマキ	平年並	平年並	小	普通	第2世代成虫				1) 第3世代幼虫の防除時期は、孵化直後～2齢幼虫期までで、第2世代成虫発生（左図）のピークの1週間後が防除適期です。
イチゴ	炭疽病	—	やや多	中	普通	発病密度				1) 葉かき後の定期的な防除と、降雨後の防除を徹底してください。 2) 薬剤散布は、株元まで十分かかるよう、畝やベンチの両側からも散布してください。 3) 罹病した株は、感染源にならないようすみやかに除去してください。 4) 灌水は、水滴が跳ね返らないようにしてください。
ツツジ類	褐斑病	—	少	小	低	発病密度				1) 分生子は雨とともに飛散したり、昆虫の体に付着したりして伝播します。 2) 防除は隅々までかかるよう丁寧に散布してください。
	ツツジグンバイ	—	少	小	低	成虫密度				1) 高温乾燥条件が続けば盛んに繁殖するので注意してください。 2) 成虫・幼虫も葉の裏面に生息しているので、葉の裏面に薬剤がかかるよう丁寧に散布してください。

### 3. 発生時期・発生量（平年比）の予察根拠

作物名	病虫害名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
イネ	穂いもち	-	少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報（7月18日発表）によると、気温は低い予想（-）</p> <p>2) 巡回調査圃場（7月第2週）では、葉いもちの発病圃場率は23.0%（平年49.6%）と少、上位葉進展株率は0.2%（平年3.3%）と少（-）</p> <p>3) プラストムでは、まとまった感染好適日が7月4日以降未出現（-）</p> <p>4) 一般圃場では、葉いもちの発生は少～多（概して少）（-）</p> <p>考察： 気象条件と、感染源となる葉いもちが少ないことから、予想発生量は少と考えます。</p>
	紋枯病	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報（7月18日発表）によると、気温は低い予想（+）</p> <p>2) 巡回調査圃場（7月第2週）では、発病圃場率は6.9%（平年12.4%）と少、発病株率は1.1%（平年5.3%）と少（-）</p> <p>3) 一般圃場では、発生は無～平年並（概してやや少）（-）</p> <p>4) 農業研究所作物研究課の圃場では、水稻の茎数は平年並（±）</p> <p>考察： 巡回調査結果や一般圃場の発生状況を考慮して、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	白葉枯病	-	少	<p>要因</p> <p>1) 巡回調査圃場（7月第2週）では、発病圃場率は0%（平年1.0%）と少（-）</p> <p>2) 一般圃場での発生は無～平年並（概して少）（-）</p> <p>考察： 発病増加要因がないので、予想発生量は少と考えます。</p>
	斑点米カメムシ類	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報（7月18日発表）によると、気温は低い予想（+）</p> <p>2) 7月第2週の巡回調査のすくいとりで、発生箇所率は59.5%（5年平均35.9%）と多の傾向、畦畔における平均虫数は1.7頭（5年平均2.7頭）とやや少の傾向（±）</p> <p>3) 一般圃場では、発生は少～やや多（概して平年並）（±）</p> <p>考察： 気象要因と巡回調査の結果を重視して、予想発生量はやや多と考えます。</p>
	イネクロカメムシ	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報（7月18日発表）によると、気温は低い予想（+）</p> <p>2) 県予察灯（畑・松阪市）では、7月第2半旬までの虫数は306頭（平年159頭）と多（+）</p> <p>3) 巡回調査圃場（7月第2週）では、発生圃場率は1.7%（平年2.7%）とやや少、25株当平均虫数は0.0頭（5年平均0.3頭）と平年並の傾向（-）</p> <p>4) 一般圃場では、発生は無～平年並（概してやや少）（-）</p> <p>考察： 巡回調査と一般圃場の結果を考慮して、予想発生量はやや少と考えます。</p>

作物名	病虫害名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
イネ	ツマグロヨコバイ	-	平年並	<p>要因</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 予察灯(7月第2半旬まで)では、誘殺数は御浜町で0頭(平年25.5頭)、紀北町で0頭(平年1.2頭)、伊賀市で4頭(平年70.0頭)、松阪市(水田)で0頭(平年49.2)と少 (-)</li> <li>2) 巡回調査圃場(7月第2週)では、払い落としによる発生圃場率は40.5%(平年31.4%)と多、平均成虫数は3.4頭(5年平均1.1頭)と多の傾向、平均幼虫数は19.1頭(同3.5頭)と多の傾向 (+)</li> <li>3) 定点におけるすくい取りによる調査では成虫で0.2頭(平年0.6頭)と少の傾向、幼虫で0.3頭(平年0.3頭)と平年並の傾向 (-)</li> <li>4) 一般圃場での発生は、無~平年並(概してやや少) (-)</li> </ol> <p>考察: 特に大きな増減要因もないので、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	セジロウンカ	-	(県南部) 平年並  (その他) やや少	<p>要因</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 予察灯(7月第2半旬まで)では、誘殺数が県南部の御浜町で0頭(平年34.5頭)、紀北町で0頭(平年52.2頭)、伊賀市で0頭(平年1.4頭)、松阪市(水田)で0頭(平年6.7)と少 (-)</li> <li>2) 巡回調査圃場(7月第2週)では、県南部の紀州で発生圃場率・虫数はそれぞれ60%(5年平均56.0%)・0.8頭(5年平均8.9頭)、7月18日の調査では発生圃場率・虫数はそれぞれ33.3%・0.9頭と平年並の傾向 (±)</li> <li>3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、県内全体の発生圃場率は5.5%(平年17.3%)と少、平均虫数は0.1頭(5年平均0.9頭)と少の傾向 (-)</li> <li>4) 九州各県では、多飛来の兆候なし (-)</li> <li>5) リアルタイムウンカ飛来予測(NARC等調査)による本県への飛来予測は6月19、27日のみであり、7月以降は未飛来を予測 (-)</li> <li>6) 一般圃場では、無~平年並(概してやや少) (-)</li> </ol> <p>考察: 九州各県や本県の一般圃場では少ない状況ですが、巡回調査の結果を考慮して、県南部の予想発生量は平年並、その他地域はやや少と考えます。</p>
	トビイロウンカ	-	やや少	<p>要因</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 予察灯(7月第2半旬まで)では、誘殺数は、松阪市で0頭(平年0.3頭)、御浜町で0頭(平年1.2頭)、紀北町で0頭(平年0頭)、伊賀市で0頭(平年0.1頭)と平年並 (±)</li> <li>2) 巡回調査圃場(7月第2週)では、発生圃場率は0.3%(平年0.1%)、平均虫数は0.0頭(5年平均0.0頭)と平年並の傾向 (±)</li> <li>3) 九州各県では、多飛来の兆候なし (-)</li> <li>4) リアルタイムウンカ飛来予測(NARC等調査)による本県への飛来予測は6月19、27日のみであり、7月以降は未飛来を予測 (-)</li> <li>5) 一般圃場では、無~平年並(概してやや少) (-)</li> </ol> <p>考察: 特に増加要因もないので、予想発生量はやや少と考えられます。</p>



作物名	病虫害名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
ダイズ	紫斑病	-	少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月18日発表)によると、気温は低くない予想 (-)</p> <p>2) 昨年の発生は少 (-)</p> <p>3) 一般圃場(四日市・鈴鹿)では、発生は無 (-)</p> <p>考察: 特に増加する要因も見られないので、予想発生量は少と考えます。</p>
	コガネムシ類	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 県予察灯(畑・松阪市:7月第1半旬~第2半旬)では、誘殺数はドウガネブイブイ 128頭(平年 95.4頭)と多、ヒメコガネ 32頭(平年 65.2頭)と少 (±)</p> <p>2) 県予察圃フェロモントラップ(松阪市:6月上旬~7月中旬)では、誘殺数はマメコガネ 628頭(9年平均 184頭)、ヒメコガネ 18頭(同 62.3頭)、ドウガネブイブイ 55頭(同 18頭)とやや多の傾向 (+)</p> <p>3) 一般圃場(桑名、四日市、鈴鹿)では、発生は無 (-)</p> <p>考察: 県予察灯及び県予察圃フェロモントラップのコガネムシ類の誘殺数を考慮して予想発生量は平年並と考えます。</p>
	ハスモンヨトウ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃フェロモントラップ(松阪市:7月第4半旬まで)では、誘殺数は 342頭(平年 426頭)とやや少 (-)</p> <p>2) 菰野町の自動計数装置(6月第2半旬~7月第3半旬)では誘殺数は 272頭(過去2年平均 165頭)と多の傾向 (+)</p> <p>考察: 特に増減する要因も見られないので、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	吸実性カメムシ類	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 県予察灯(畑・松阪市:7月第1半旬~第3半旬)では、誘殺数はアオクサカメムシ 173頭(平年 36.1頭)と多、クサギカメムシ 5頭(平年 29.0頭)と少、イチモンジカメムシ 57頭(平年 9.2頭)と多 (+)</p> <p>考察: 県予察灯の吸実性カメムシ類の誘殺数を考慮して予想発生量はやや多と考えます。</p>
カンキツ	黒点病	-	少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月18日発表)によると、気温は低くない予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃(7月中旬)では、果実発病度 27.7(平年 25.5)と平年並の傾向 (±)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、平均発病度 0.6(平年 0.0007)と多 (+)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は少~やや少(概して少) (-)</p> <p>考察: 大きな増減の要因はなく、一般圃場の発生状況を重視して、予想発生量は少と考えます。</p>

作物名	病虫害名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
カンキツ	かいよう病	-	温州少 中晩柑少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月18日発表)によると、気温は低くない予想 (-)</p> <p>2) 県予察圃(7月中旬)では、発病葉率7.7%(平年17.9%)と少の傾向、発病果率15.8%(平年35.9%)とやや少の傾向 (-)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、新葉における発病は温州みかんでは認められず、中晩柑では平均発病度1.4とやや少の傾向 (-)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は少~やや少(概して少) (-)</p> <p>考察: 大きな増減の要因はなく、一般圃場の発生状況を重視して、予想発生量は温州みかん、中晩柑類ともに少と考えます。</p>
	ミカンハダニ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月18日発表)によると、気温は低くない予想 (-)</p> <p>2) 県予察圃(7月中旬)では、100葉当寄生虫数は、無防除区で5.6頭(平年18.2頭)と少の傾向、防除区で8.9頭(平年3.3頭)とやや多の傾向 (±)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、新葉における平均寄生葉率は9.1%(平年9.7%)と平年並、1葉当平均寄生虫数は0.4頭(平年0.4頭)と平年並の傾向 (±)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並~やや多(概して平年並) (±)</p> <p>考察: 大きな増減の要因はなく、一般圃場の発生状況を重視して、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	チャノキイロアザミウマ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃(7月上旬)では、粘着トラップへの誘殺数は1.3頭(平年3.1頭)とやや少の傾向 (-)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第2週)では、被害果率は0%(平年0.8%)と少 (-)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量はやや少~平年並(概して平年並) (±)</p> <p>考察: 大きな増減の要因はなく、一般圃場の発生状況を重視して、予想発生量は平年並と考えます。</p>
果樹共通	カメムシ類	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 予察灯(御浜町:4月1日~7月10日)では、誘殺数はチャバネアオカメムシ151頭(平年2,150頭)、ツヤアオカメムシ887頭(平年2,568頭)と少の傾向 (-)</p> <p>2) 予察灯(畑・松阪市:4月1日~7月15日)では、誘殺数はチャバネアオカメムシ825頭(平年623頭)とやや多、ツヤアオカメムシ227頭(平年141頭)と多 (+)</p> <p>3) フェロモントラップ(4月1日~7月16日)では、チャバネアオカメムシ誘殺数は、山地(津市白山町川口)で1,084頭(平年1,500頭)とやや少の傾向、中間地(津市白山町二本木)で4,049頭(平年2,016頭)と多の傾向、平坦地(松阪市嬉野川北町)で143頭(平年448頭)とやや少の傾向 (±)</p> <p>4) 巡回調査圃場(7月第2週)では、圃場への飛来は未確認 (-)</p> <p>5) 一般圃場では、やや少~平年並(概してやや少) (-)</p> <p>考察: 今後、力キ園等に飛来する可能性があると考えられ、予想発生量は平年並と考えます。</p>

作物名	病虫害名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
チャ	炭疽病	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月18日発表)によると、気温は低くない予想 (±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第2週)では、1㎡当平均発病葉数は9.6(平年2.1)と多 (+)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は少~平年並(概して平年並) (±)</p> <p>考察: 大きな増減の要因はなく、一般圃場の発生状況を重視して、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	カンザワハダニ	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月18日発表)によると、気温は低くない予想 (-)</p> <p>2) 県予察圃(7月中旬)では、寄生葉率は0%(平年4.6%)と少の傾向、1葉当寄生虫数は0頭(平年0.16頭)と少の傾向 (-)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、平均寄生葉率は0.3%(平年1.8%)と少、平均寄生虫数は0.00頭(平年0.04頭)と少の傾向 (-)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は少~平年並(概してやや少) (-)</p> <p>考察: 大きな増減の要因はなく、一般圃場の発生状況を重視して、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	チャノミドリヒメヨコバイ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃吸引粘着トラップ(4月第1~7月第3半旬)では、誘殺数は49頭(平年46頭)と平年並の傾向 (±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第2週)では、平均たたき落とし虫数は2.5頭(平年1.8頭)と多 (+)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>考察: 大きな増減の要因はなく、一般圃場の発生状況を重視して、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	チャノキイロアザミウマ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃吸引粘着トラップ(6月第1~7月第3半旬)では、誘殺数は12,432頭(平年10,188頭)とやや多の傾向 (+)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第2週)では、平均たたき落とし虫数は7.1頭(平年27.7頭)と少 (-)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>考察: 大きな増減の要因はなく、一般圃場の発生状況を重視して、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	チャノコカクモンハマキ	平年並	平年並	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃フェロモントラップ(6月第1~7月第3半旬)では、誘殺数は614頭(平年348頭)と多の傾向 (+)</p> <p>2) 県予察圃フェロモントラップ(6月第1~7月第3半旬)では、誘殺時期の傾向は平年並 (±)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、1㎡当巻葉数は0.0(平年0.1)と平年並 (±)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>考察: 大きな増減の要因はなく、一般圃場の発生状況を重視して、予想発生量は平年並と考えます。</p>

作物名	病虫害名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
イチゴ	炭疽病	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月18日発表)によると、気温は低くない予想 (±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第2週)では、平均発病株率は0.2%(平年0.2%)と平年並 (±)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は平年並~やや多(概してやや多) (+)</p> <p>考察: 大きな増減の要因はなく、予想発生量はやや多と考えます。</p>
ツツジ類	褐斑病	-	少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月18日発表)によると、気温は低くない予想 (+)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第2週)では、新梢発病葉率0%(平年0.2%)、旧枝発病葉率0%(3年平均11.8%)と少の傾向 (-)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は少 (-)</p> <p>考察: 特に大きな増加要因がないので、予想発生量は少と考えます。</p>
	ツツジゲンバイ	-	少	<p>要因</p> <p>1) 巡回調査圃場(7月第2週)では、ヒラドツツジにおける成虫0頭・幼虫0頭(平年値: 成虫1.6頭・幼虫0.5頭)、サツキにおける成虫0頭、幼虫0頭(平年値: 成虫4.5頭・幼虫7.1頭)と少の傾向 (-)</p> <p>2) 一般圃場では、発生量は少 (-)</p> <p>考察: 特に大きな増加要因がないので、予想発生量は少と考えます。</p>

## 4. 予察項目の見方

### 1) 「作物別の状況」の見方

発生時期（平年比）： 平年の発生月日からの差を「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階評価で予測します。ただし、発生時期が毎年大きく変化する病害虫では、日数の基準が下記より大きくなります。発生時期を予察する意義の小さい病害虫では予察しません。

日数		-6	-5	-4	-3	-2	-1	平年 発生日	1	2	3	4	5	6	
評価		早	やや早		平年並				やや遅			遅			

発生量（平年比）： 発生密度の平年値からの差を「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階評価で予測します。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

		平年値 ↓				
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少	やや少	平年並		やや多	多

発生量（程度）： 発生程度を「小、中、大、甚」の4段階評価で予測します。評価の基準値は病害虫毎に異なりますが、大雑把には、「見た目の多さ・少なさ」です。甚になるほど見た目は多くなり、小になるほど見た目は少なくなります。「発生量（平年比）」と比べることによって、「平年並に発生程度が小さい」「発生程度は大きい平年並の発生量である」「平年より多いが、発生程度は小さい」「平年よ

りやや少ないが、依然として発生程度は中くらいである」等のように判断してください。

小	中	大	甚
---	---	---	---

要防除圃場率（平年比）： 防除の必要性の目安を「低、普通、高」の3段階評価で予測します。「普通」であれば、県下の大半の圃場では防除暦に沿った通常の防除をしていれればよいと予想されます。「高」であれば、防除時期の見直しや追加防除などが必要な圃場の割合が相当増加すると予想されます。「低」であれば、防除回数を減らせるか防除しなくても済むような圃場の割合が相当増加すると予想されます。

低	普通	高
---	----	---

発生消長の一例： 発生予報は向こう1か月の予報ですが、その前後を合わせて40日ほどの病害虫の発生消長の一例をグラフで示します。大まかな目安として利用してください。

防除の注意事項： 向こう1か月の病害虫の特性と防除に関する説明です。

### 2) 「発生時期・発生量（平年日）の予察根拠」の見方

（±）：平年並の要因

（+）：発生量増加または発生時期遅延の要因

（-）：発生量減少または発生時期早期化の要因

## 5. 今月のトピックス 「イチゴのハダニ類について」

### 1. イチゴのハダニ類の種類

カンザワハダニ（赤色）とナミハダニ（主に薄緑色）が主体ですが、本県では近年ナミハダニが多くなってきています。ナミハダニは色が目立たないので多発するまで気がつかないことがあります。ハダニ類は、かすり状になった葉の食害痕を目印にすると初期発生のうちから見つけやすいでしょう。



図1 ナミハダニの被害



図2 カンザワハダニ

### 2. 防除について

#### 1) 育苗期

ダニがいなければ防除の必要はありません。発生している場合は、本圃で使いにくい薬剤や安価な薬剤を使いましょう。

#### 2) 定植前

ダニを本圃に持ち込まないように、徹底した薬剤防除が必要です。

#### 3) ビニール被覆前

被覆後は防除しにくくなるので、念入りに防除をしてください。

#### 4) 本圃

天敵のチリカブリダニを使うことができます。

薬剤で防除する場合は、次の点に注意しましょう。

- ・収穫前日数の厳守
- ・ミツバチへの影響

・チリカブリダニを導入の場合はそれに対する影響

#### 5) 全期間での注意

圃場の近くでハダニが発生している場合、その場所の除草や防除によってイチゴの圃場にハダニが逃げてくる可能性があります。葉かきした葉も圃場の近くには捨てないようにしましょう。

### 3. チリカブリダニの使い方

ボトル入りで販売されています。より効果的に導入できるように、普及センターや販売所と相談してください。本県ではイチゴ以外の用途も含めて下表のように多数使われており、イチゴ農家にもたのもしい助っ人となってきています。



図3 チリカブリダニ(農業研究所提供)

表1 三重県におけるチリカブリダニ剤の出荷量

資材名	19 農薬年度	20 農薬年度 (現在まで)
チリカブリダニ剤	1607 本	1696 本

ハダニが発生しているけれどもまだ低密度という時期が最適な導入時期です。発生密度の低いうちに使用すれば、収量・品質にほとんど影響を与えず防除できる可能性があります。

ある程度ハダニが増えてしまったら、導入前または導入後に農薬で密度を下げなければなりません。他の病害虫の防除も必要になるかもしれません。どの農薬がチリカブリダニと併用して使えるかは、普及センター等に相談してください。



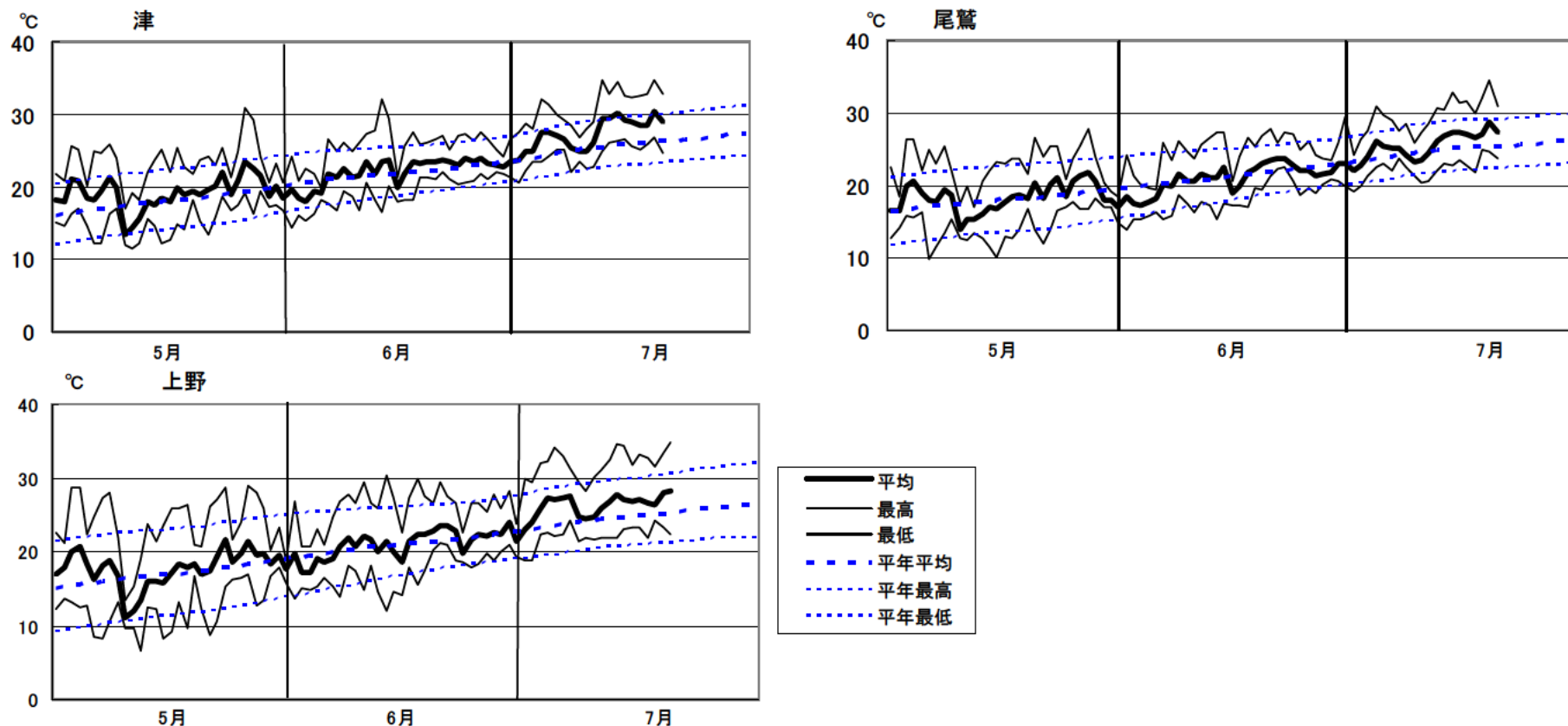
## 6. 気象のデータ

### 東海地方 1 か月予報 (平成 20 年 7 月 18 日 名古屋地方気象台発表)

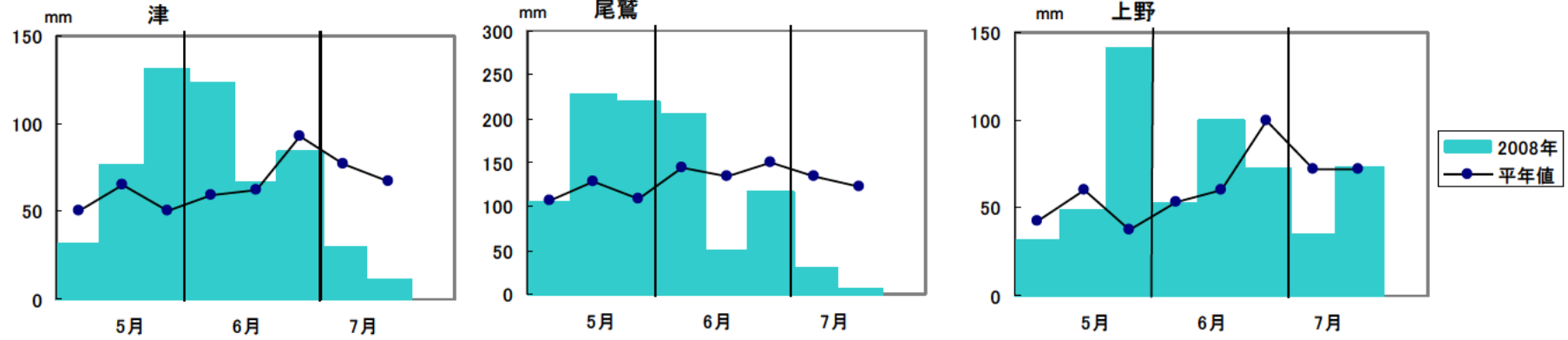
東海地方の向こう 1 か月は、平年と同様に高気圧に覆われて晴れる日が多いですが、気圧の谷や南からの湿った空気の影響を受ける時期もあるでしょう。

1 週目 (7 月 19 日～25 日)	期間のはじめは高気圧に覆われて晴れますが、その後は気圧の谷や南からの湿った空気の影響で雲が広がりやすいでしょう。	晴れ日数の平年値 約 4 日
2 週目 (7 月 26 日～8 月 1 日)	平年と同様に高気圧に覆われて晴れる日が多いですが、南からの湿った空気の影響を受ける日がある見込みです。	同 約 5 日
3～4 週目 (8 月 2 日～15 日)	平年と同様に高気圧に覆われて晴れる日が多いですが、南からの湿った空気の影響を受ける時期がある見込みです。	同 約 9 日

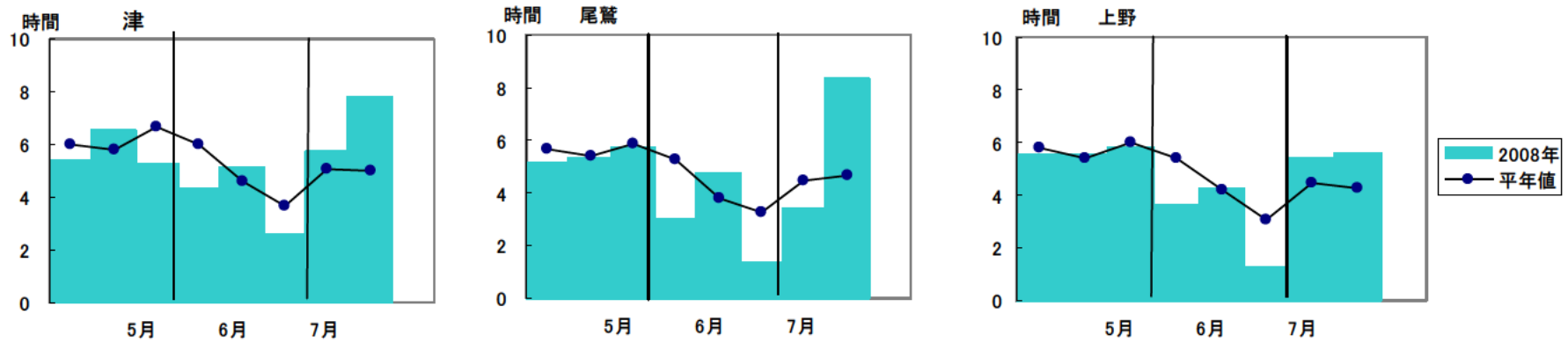
### 気温の日別推移 (気象庁発表データ <http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php> から作成)



降水量の旬別推移 (気象庁発表データ <http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php>から作成)



日照時間の旬別推移 (気象庁発表データ <http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php>から作成)



## 7. おしらせ（前回と異なる項目にはNEWの印があります）

### 1) 利用方法

この病害虫発生予報は、ほぼ定期的に発表されます。本年度の予定は次のよう  
です。

第1回 4月24日（木） 第2回 5月29日（木）

第3回 6月26日（木） 第4回 7月24日（木）

第5回 8月28日（木） 第6回 10月23日（木）

第7回 3月19日（木）

これらの資料は全部または一部をコピーして再配布しても構いませんが、必  
ずページの右下にある「三重県病害虫防除所」の文字が入るようにしてくださ  
い。

病害虫防除所ホームページには、この予報をはじめとして、不定期に発表され  
る警報、注意報、特殊報、技術情報や、各種のグラフ、写真も載っています。下記  
のアドレスからお入りください。

<http://www.mate.pref.mie.jp/bojyosyo/>

このホームページは、原則フリーリンクです。できるだけ多くの農業関係者  
の方にホームページをご覧いただきたいと思っていますので、ぜひ、市町、JA  
等みなさんのホームページにリンク設定していただくことをお願いいたします。  
この場合、事前の承諾申請等は不要です。

なお、事後で結構ですのでメールにてご一報いただきたくお願いいたします。

### 2) メール配信サービス

予報、警報、注意報、特殊報、技術情報が発表されたときに、ホームページに掲  
載されたという「掲載通知」を電子メールでお知らせしています。このメールの

配信を希望される方は、下記のアドレスからお申し込みください。

<http://www.mate.pref.mie.jp/bojyosyo/merumaga.htm>

### 3) 農薬登録状況の最新情報

農薬の販売や使用に当たっては、農薬登録上の制限があります。農薬の使用時  
はラベルをよく読んでください。次のインターネットサイトでは、最新の農薬登  
録状況が確認できます。

独立行政法人農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報」

<http://www.acis.famic.go.jp/searchF/vtllm000.html>

### 4) 三重県病害虫防除の手引き

病害虫防除所ホームページに平成20年1月8日現在の「三重県病害虫防除の  
手引き」を掲載しました。下記のアドレスからお入りください。

<http://www.mate.pref.mie.jp/bojyosyo/nouyaku/tebiki/20080108/20080108tebik.html>

### 5) 本冊子の利用の手引き書

本冊子の利用方法を説明をした「病害虫発生予報利用の手引き」を平成20年  
度用に更新しました。下記のアドレスからお入りください。

[http://www.mate.pref.mie.jp/bojyosyo/yoho/h20yohotebiki\\_.pdf](http://www.mate.pref.mie.jp/bojyosyo/yoho/h20yohotebiki_.pdf)